

中
2023

国

語

始める前に左の注意事項を読みなさい。

- 始めの合図があるまで開いてはいけません。
- 問題は全部で23ページあります。
- 答えはすべて解答用紙に書きなさい。
- 問題冊子、解答用紙のいずれにも受験番号、氏名を書きなさい。
- 質問のあるときは静かに手をあげ先生の指示を待ちなさい。
- 終わりの合図があったら、ただちに筆記用具を置きなさい。
- 問題冊子を持ち帰ってはいけません。

(第1回)

受験番号	
氏	名
	ふりがな

□ 次の〈文章Ⅰ〉、〈文章Ⅱ〉それぞれの文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

〈文章Ⅰ〉

最後のポータッジ（注・湖と湖をつなぐ道）を終え、カヤックに荷物をつめ込んで、ふたたび湖面へと漕ぎ出しました。この先にポータッジはないので、もうムース湖に到着したとばかり思っていたのですが、正確にはここはまだ別の湖、サカー湖でした。ここから南西に向かつて12キロほど細長くのびた湖面は、途中で二カ所、兩岸がせばまったところで呼び名が変わり、サカー湖、ニューファウンド湖、ムース湖と続くのです。

いまいちど気を引きしめなおし、ムース湖に向けて漕ぎ出すと、まず西から突き出た岬を南東にまわり込むようにして細い水路を進みました。岬を抜け、南西に進路を変えて1キロほど進んだ、そのときです。視線の向こうに横たわる森のシルエツトから、ひときわ大きなマツの木が突き出ているのが見えました。

〈あれは、いったいなんだろう？〉

マツの木のてっぺんに近い幹の部分に、まるでこぶのように大きな黒い塊かたまりがのつています。目をこらしてよく見ると、そのすぐ脇に一羽のハクトウワシがとまっています。

〈そうか、ハクトウワシの巣だ〉

その巣は枝を組み上げて作られていて、直径はゆうに3メートルを越えているでしょうか。はやる気持ちをおさえながら、もつと観察しやすいように岸にカヤックをつけ、防水バッグからカメラを取り出しました。200ミリレンズをつけてファインダーをのぞくと、その巣は、白い雲と青い空を背景にして、まるで天空に浮かぶ楼閣かくのように見えました。さらによく見えるように二倍のテレコンバーター（画面中央部を拡大するレンズ）をつけると、巣の上で首を動かすヒナの姿がかすかに見えました。人里離れた湖の畔ほとりで新しい生命を育むハクトウワシ。その

ことを①誰かに伝えたくて、ぼくはシャッターを切りました。

（まさか、旅の途中でハクトウワシの営巣を撮影できるなんて……）

ノースウッズにやってきたことは決して間違いではなかったと思える、幸せな瞬間でした。

ジム・ブランデンバーグの写真集『ブラザー・ウルフ』と出会う前、つまりあのオオカミの夢を見る前に、すでにぼくは、写真家になりたいと心に決めていました。なぜ写真家だったのか。どうしてカメラを手にとったのか。そのことを説明するには、ぼくの人生に多大な影響を与えた、もうひとりの写真家について語る必要があるでしょう。

もともとぼくは、「ジャーナリスト」②という言葉に漠然とした憧れをいだいていました。それを意識するようになったのは、高校二年が過ぎて、その先の進路を考えるようになったときです。そのきっかけがなんだったのかは、いまでもよく思い出せません。誰かの仕事に感銘をうけたわけでもなく、身近にそういう職についていた人がいたわけでもない。ジャーナリストというものがどういう仕事なのか、なんの社会経験もない高校生がどこまで具体的に理解できていたのかも怪しいものです。

でも単純に、横文字の響きがかっこいいと思っただけではないと思います。ぼくは小学生の頃から図工や音楽の時間が苦痛で、自分の内側にあるものを表現することにはコンプレックスとっていいほどの苦手意識がありました。物理や生物といった理系分野にかなりの好奇心はあったものの、数学に弱く、どちらかといえば文系向きだと思いつきました。そんな流れから、自分の外側に存在するものを取材して人に伝えるという仕事なら自分に向いていそうな、しかもおもしろそうな仕事だと考えていたのです。

この社会がさまざまな問題をかかえ矛盾に満ちた世界であることは、高校生であつても、日々の生活の中で知らず知らずのうちに気づかされます。社会の仕組みをもっと知りたい。問題点をあきらかにして人々に広く知ら

せたい。それによって、世界を少しでもいい方向に変えていけたら……。そんな淡い希望を胸に、大学への進学を決意しました。

③、いざ大学に入ってみると、ジャーナリストを目指すという道にいくつかの④軌道修正が必要になりました。それにもやはり、ワンダーフォーゲル部での山登りの経験が大きく影響しました。つまり、ぼくにとつて心から伝えたいと思えることは、人間社会の仕組や出来事ではなく、自然のことなのだと感じたのです。自然のこと。それは前にも書いたように、山肌やまのしづに沢の水がとうとうと流れている様だったり、人間の力を超えた野生動物の姿だったり、満天の星空を見せてくれる宇宙の気配だったりのことです。山奥に分け入った先に待ちうけていたそれらのことは、都会育ちのぼくの目を開かせてくれました。ぼくたち人間は工場で作られたものではありません。他の動物たちと同じように、母なる自然の子どもとして、この地球に産み落とされたのです。そのことを再確認させてくれるような体験もたくさんありました。自然を知ることが、矛盾の多い都市生活を見つめなおし、問題点を⑤浮き彫りにして、ぼくらが失ってしまった自然の一部としてのバランス感覚を、もういちど取り戻させてくれる可能性を秘めているような気がしたのです。そんなことを考えはじめると、新聞やテレビから流れてくる毎日のニュースを見ていると、^A違和感ばかりがつのつてくるようになります。悲しい事件、変わらない政治、不安をあおる経済情勢……。不協和音に満ちた人目を引くようなことばかりが取り上げられ、こわだか声高に叫ばれます。

こんなふうには書けば、視野が狭く極論に過ぎると言われるかもしれません。でも、美しくおだ穏やかな旋律のように、聞いているだけで澄んだ気持ちになり、明日を生きる活力がわきあがってくるような情報が、あまりにも少ないように、そのときは感じたのです。紙面や放送時間の限られたマスメディアのニュースだけを取り上げて文句を言っても仕方のないことでしょう。そもそもぼくが伝えたいと思うようなことは、「ニュース(NEWS)」、つま

り「新しいこと」ではないのです。沢の水の美味^{おい}しさも、野生動物の輝きも、星空の美しさも、いまこの瞬間に伝えなくては価値が消滅してしまうような情報ではありません。いってみれば、「^⑥ただ、いつも、そこにあるもの」にすぎないのです。

しかし、人と自然とのつながりが見えにくくなったこの現代社会のなかでは、なんの変哲もないような自然のことこそ、伝えるべき価値があるものに思えてなりませんでした。どこかに、ぼくと同じように、都市の外に広がる野生の息づく世界を知りたいと思っている人がいるかもしれない。自然に生かされていると感じるときの、あの深い充足感を求めている人がいるかもしれない。そんな人々に向けて、いつか、自分が見聞きし体験したことを伝えたい。高校生のときにいだきはじめてジャーナリストというものへの漠然^{ぼくぜん}とした憧れが、山を歩いていくうちに、少しずつ具体的な願望となつて見えてきました。

〈文章Ⅱ〉

おもいがけずハクトウワシの巣を撮影することができて、とてもいい気分で、ふたたびカヤックを漕^こぎ出しました。細長い水路の中でも特に狭くなった箇所を抜け、広がりのある湖面に出ると、そこはもうサカ^さカ^か湖ではなくてニューファウンド湖でした。名前の通り馬蹄^{ばていけい}形をしたホースシュー (Horse Shoe) 島の脇を通り過ぎると、前方からはつきりとしたエンジン音が聞こえてきました。船外機をつけたアルミのボートが水飛沫^{みずしぶき}をあげながら勢いよくこちらにやってくるのが見えます。人が二人乗っていて、釣りにでも行く途中なのかもしれません。

ボートはぼくのカヤックに気がつくくと、遠巻きに進むようにして対岸に近いところを北へと向かっていきました。やがて視界から消えると、今度はその波が押し寄せてきたので、パドルで水面を押さえてバランスを保ち、衝撃をやり過ぎました。ここはまだウィルダネス保護区のなかですが、どうやらモーターの使用が許可された

エリアのようです。そういえば、今朝越えてきたポータッジの入口にも銀色のボートが停めてありました。
⑦、たまたま出会わなかっただけでバスウッド湖もモーターボートの使用が可能なエリアだったのかもしれない。ルールはともかく、昨日までずっと自然界の音だけにつつまれて旅をしてきたせいで、エンジンが生み出すせわしない音がとても奇妙なものに感じられました。まわりの風景から浮いたような音で、遠くへ去った後でも耳の奥にざわざわとした違和感が残るのです。騒音というのは自分が出しているときには気づかないものなのでしょう。そういうぼくだって、イリーにたどり着くために森のなかの道をグレッジと一緒に車を飛ばしてきたのです。そのときはなんとも思わなかったけれど、森の動物たちからすれば、^⑧爆音をまき散らしながら走り去る鉄の塊はなんとも奇妙なものに見えたにちがいません。

久しぶりのエンジン音を耳にして、一気に現代社会に連れ戻されたような気がしました。そして、ウィルダネスの旅も終わりが近づいていることを実感せずにはいられませんでした。あとどれくらいでムース湖なのだろうと、もういちど地図を確認してみると、現在地からすぐ近くの岸にポータッジを示す赤い線が書かれているのが目にとまりました。そのポータッジは、ファウンド湖という名の、周囲が1.5キロほどの小さな湖につながっていました。そこから先にはどこにもポータッジがのびていません。つまりその湖は、このポータッジでしかたどり着くことができないのです。しかもその湖畔には、キャンプ地を示す赤丸がひとつだけ記載されていました。ということは、そのキャンプ地に誰もいなければ、ファウンド湖はぼくだけの貸し切りの湖になるということです。

⑨ 〈自分だけの湖……〉

誰に邪魔されることもなく、ウィルダネス最後の夜を静かに過ごすにはもってこいかも知れません。そんなわけで、寄り道好きの性格がここでも顔を出して、急遽そのポータッジを目指すことにしました。

ポーターの入口は簡単にみつきり、カヤックを湖面から引き上げると、流されないようにロープで木に結びつけました。そして、長さ30ロッド(約150メートル)しかない森のなかの一本道を手ぶらで歩くと、すぐに終わりが見えてきました。たどり着いたファウンド湖は、^⑩期待した通りひっそりとして穏やかな湖でした。キャンプ地はポーターの終点のすぐそばにあり、幹のまっ白なシラカバが立ち並ぶ開放的な空間でした。湖の雰囲気もキャンプの居心地も申し分ありません。幸い誰もいなかったため、今夜はここで一泊することに決め、すぐに荷物とカヤックを持つてくることにしました。

テントを張って野営の準備を整え、昼食を食べてのんびりした後、カヤックで湖の散策をしました。空は気持ちよく晴れわたり、白い雲がちぎれちぎれに浮かんでいました。これまでは対岸がかすむほどの大きな湖ばかりを漕いできました。でもここは、首を左右に軽くまわすだけで湖の周囲をすべて見わたすことができるのです。湖の底は浅く水が澄んでいて、湖底に生える水草がゆらゆらと揺れているのはつきりと見えました。その上をカヤックで通り過ぎると、まるで原っぱの上を飛んでいるかのように感じました。箱庭のような美しさと優しさがあり、荒波におびえる必要もないので、とても心が落ち着きました。

〈もしジムに会えなかったら、ここにまた戻ってきたいな……〉

温かい日射しを浴びながら岸に沿ってゆつくりと進むと、やがて、湖の西の端にある大きなビーバーロッジにたどり着きました。ロッジのまわりには、ビーバーが最近齧ったばかりの、切り口が白く鉛筆のように尖った木の枝がいくつも浮いていました。

〈ここにもビーバーがいるんだ。今夜もぼくを脅かしてやってくるかもしれない〉

そんなことを考えながらビーバーロッジの前を通り過ぎた、そのときでした。いきなり目の前の茂みからバチャバチャバチャッと騒がしい音をたてながら、なにか黒いものが飛び出してきたのです。あまりに突然だったので、

ぼくは心底びっくりして、その場で固まってしまいました。

茂みから飛び出してきたのは、なんと一羽のルーンでした。旅の途中で何度も出会ってきた体長80センチほどの水鳥ですが、くちばしが剣のように尖とがっていて、これほど近くで翼を広げられると威圧感がありました。ルーンはこちらを向くと、立ち上がるように体を反そらせ、まるで水面を走るように足踏みをしながら突進してきたのです――。

ルーンのただならぬ雰囲気みずしぶきに圧倒されて、声も出ません。襲いかかってくるのかと思って、パドルを握る手に力が入りました。しかしそれ以上ルーンが近づいてくることはありませんでした。^⑩悲鳴にも似た叫なげび声をあげて、翼と足でバシャバシャと水飛沫みずしぶきをあげながら目の前を左右に行ったり来たりした後、そのまま水中にもぐってしまったのです。そして少し離れたところに浮かび上がって、神経質しんけいしつそうに首を左右に振って、もうひと鳴き、鋭い声をあげました。ぼくははつとして、ルーンが飛び出してきた方向を見ました。あの慌あわてようからして思いあたる節ふしがあつたのです。予想した通り、^⑪水際みずぎわの茂みのなかにはルーンの巣がありました。草を編あんで作られた、浮き島のような直径70センチほどの丸い巣です。くぼんでいる巣の真ん中には黄土色おうどいろをした卵が二つ、仲良く並んでいました。

〈これを守ろうとしていたんだ〉

ふたつの卵は、太陽の光を受けて、まるでこの湖に隠された秘密のたからもののように、金色に輝いて見えました。

へレンジャーの言った通りだ。いまは^⑫そういう季節きせつなんだな……

ぼくはすぐにその場を離れ、湖の真ん中あたりまで漕こぎつけました。そしてこれ以上ルーンの親鳥を刺激し

ないように十分に離れたのを確認してから、巣のあった方角を振り返りました。人間が遠くに去ってようやく安心したのか、ルーンはゆつくりと巣の方へと近づいて、茂みのなかに消えていくのがかすかに見えました。驚きのあまりずつとドキドキと脈打っていたほどの心臓も、ようやく落ち着きを取り戻すことができました。

やはり寄り道というものはしてみるものです。ハクトウワシの巣だけでなくて、ルーンの巣までみつけることになるとは、なんて幸運な一日でしょう。しかし気分が落ち着いてしばらくすると、ある考えが頭に浮かんできました。

〈なんとかして、ルーンが卵を抱いている姿を撮影できないだろうか〉

⑭、これ以上ルーンを驚かすことは避けなくてはなりません。でも、なにか良い方法があるなら試してみたい。こんなチャンスはもう二度とないかもしれないのです。

いろんな可能性について考えてみよう、今度はビーバローッジとは反対側の、巣の南側に面した湖岸を目指して漕ぎ出しました。岸に上陸して森のなかを歩き、木立のなかの少し高台になったところからそつと顔を出して、巣のある方を眺めてみました。しかし残念ながら、ルーンの巣はちょうど草の陰かげに隠れて見えません。それにもし巣が見えたとしても、ここでは遠過ぎて撮影になりません。

〈身を隠して、水の上から近づくか……〉

こんなこともあるのかと、濃い緑色をした雨よけのポンチョを持ってきていました。カヤックを購入したイリーのアウトドア用品店で安く売っていたのです。野生動物を撮影するには、自分の気配を消すために「ブラインド」と呼ばれる迷彩色⑮の隠れ蓑みかが必要だと、いつか本で読んだことがありました。だから、このポンチョを見たときに、もしかしたら役立つかもしれないと思って買っておいただけです。でも自分の体をおおうのがやつとの大きさで、カヤック全体を隠せるほどはありません。体だけを隠したところで、水の上からカヤックが近づいてきたら、

いくらなんでもすぐにばれてしまうでしょう。もつと近くでいい場所はないかと思つて、もういちど巢のまわりを眺めていると、あることに気がつきました。

〈そうだ。あのビーバーロッジが、使えるかもしれないな〉

ルーンの巢をみつけたときだつて、ビーバーロッジを通り過ぎるまでは大丈夫だったのです。とすれば、水際みずぎわぎりぎりのところをそつと近づいて、ビーバーロッジに上陸し、その陰かげからポンチヨをかぶつて静かに撮影すればうまくいくかもしれません。でもいまはまだルーンも警戒していることだろうと思ひ、とりあえず今日はキャンプに戻り、明日まで待つてみることにしました。

夜も更ふけて、テントの中で寝袋にもぐり込んだのですが、なかなか寝つけません。

〈あのルーンはいまもずっと、卵を抱きつづけているんだらうな……〉

これまでに、鳥が巢の中で卵を温めている写真を見たことはありません。でも自分もその鳥と同じ環境に身を置いて、しかもその場でひと晩明かすという体験は、これが初めてのことでした。すぐそこにある湖。その対岸を見わたした先にあの巢があるのです。それはとてもふしぎな感覚でした。いまこの小さな湖の畔ほとりで、この瞬間に、ぼくと同じ空気を吸いながらルーンが卵を抱いている。この暗闇の中でどんな気持ちで過ごしているのでしょうか。草を編んで巢を作るのに、どれくらい時間をかけたのでしょうか。あとどれくらいの日数を温め続けなくてはならないのでしょうか……。そんなことを考えはじめると、一分一秒という時間の流れが途方もなく長いもののように感じられました。⑩ 一カ所でじつとしていているということは、卵だけでなく自分の命さえも危険にさらすということ。新しい命を育はぐむことが、動物にとってどれほど大切で命がけのことなのか、それを初めて実感した夜でした。

結局、あまり眠れないまま朝の五時を迎えると、外はすでに明るくなっていました。薄曇りの空の下、あちこちからキツツキのドラミングが聞こえてきます。マツボックリを拾つて森を歩いていると、すぐ近くでチュルル

ルルートと舌を鳴らすような鋭い音が響きました。シマリスよりもひとまわり大きなリスが木の上を走りまわり、自分の縄張りを主張しているのです。自分だけの湖だと思ってここに来たけれど、やっぱりそれはぼくの思い上がりでした。ここは、ルーンやビーバーやキツツキや、リスたちの生活の場であり、ぼくはただの通りすがりのヒトという生き物にすぎないということを、ふたたび思い知らされたのです。

蚊たちも相変わらずよろよろと群がってきますが、火をおこして煙がたちのぼると、あまり気にならなくなりました。お湯を沸かしてお茶をいれ、朝の静かなひとときを満喫しているうちに、雲が少しずつ晴れてきて、今日もいい天気になりそうでした。

昨日のうちに準備しておいたカメラとフィルム、そして三脚などの撮影機材や、ブラインド用の緑色のポンチョをカヤックに積み込みました。そして、ルーンの巣があった方角を目指して漕ぎ出しました。テントから湖の西の端までは直線距離でいえば500メートルほどしかありません。ルーンにみつからないよう湖岸に沿いながら、昨日と同じように反時計まわりで北側からビーバーロッジに近づきました。ビーバーロッジからルーンの巣までは10メートルも離れていません。音をたてないように細心の注意を払いながら、パドルをゆつくりと動かして前に進みます。ロッジが目の前まで来ると、息をひそめて、水辺の草にもなるべく触れないようにカヤックを横づけにしました。

〈この向こうにルーンがいるはず〉
いつまたルーンが飛び出してくるかもしれないと思うと、緊張して胸がしめつけられたように苦しくなりました。

〈ばれたらすぐに撮影をやめよう〉

そう誓って、最後に湖底の泥をパドルで押して、思い切ってカヤックの舳先をビーバーロッジと草の間に突つ

込みました。ぼくは、カヤックが安定したことを確かめると、腰を上げて座席から足を抜き、ビーバーロッジの太い枝の上に降り立ちました。上に乗ってみるとロッジは思いのほかしつかりしていました。機材を降ろしポンチョをかぶって、ルーンから見えないように頭を低くしながら、三脚を杖つえがわりにして一歩一歩足を運んでいきます。ゆつくりと顔を上げて、ビーバーロッジの肩越しに向こうをのぞき込みました。すると……、いました。ルーンは巢の上でじっとしています。はやる気持ちをおさえてカメラのファインダー越しにのぞいてみると、ルーンが巢の上に座っている様子がよく見えました。ルーンも頭を低くしているところを見ると、なにか近づいてくる気配を読み取って警戒しているのかもしれないかもしれません。屋根も囲いもない雨ざらしの巢は、あまりに無防備に見えました。

〈こんなところで、毎晩過ごしているんだ……〉

きつとぼくが震えながら過ごしたあの嵐の夜も、ここでじっと卵を温めつづけていたにちがいないのです。信じられないような気持ちで、ぼくは中腰の姿勢のまま三脚に寄りかかるようにして、カメラのファインダーを見つめました。

(大竹英洋著『そして、ぼくは旅に出た 〈はじまりの森 ノースウッズ〉より)

問一 ―― 部⑤、⑫、⑮の文中での意味は何か、もっともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

⑤ 「浮き彫りにする」

- ア 物事の様子が全て見えること
- イ 物事の様子が記憶に残ること
- ウ 物事の様子がはっきりとすること
- エ 物事の様子がわからなくなること

⑫ 「水際」

- ア 水面が陸地と接しているところ
- イ 陸地が水中に沈んでいるところ
- ウ 山がよく見える水面
- エ 舟から見た水の面

⑮ 「隠れ蓑」

- ア それを着れば見える範囲が限られること
- イ それを着れば隠れられなくなってしまうこと
- ウ それを着れば隠していた姿が見えること
- エ それを着れば姿が見えなくなること

問二 空らん③、⑦、⑭に入る語句を次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア もちろん イ まるで ウ もしも エ なぜなら オ まさに カ しかし
キ もしかしたら ク しかも

問三 — 部①「誰かに伝えたくて」とあるが、筆者は具体的にどんな人に何を伝えたいと言っているか。それがわかる部分を〈文章Ⅰ〉から三文で抜き出し、その最初と最後の五字を答えなさい。(句読点は含みません)

問四 — 部②とはどんな仕事だと筆者は考えているか、解答らんにあうように〈文章Ⅰ〉から五十字で抜き出し、その最初と最後の五字を書きなさい。

問五 — 部④とはどんな「軌道修正」を指しているのか、次からもっともふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

ア 社会の仕組みや問題点、出来事ではなく、母なる自然の子どもとして生まれたことを伝えること。
イ 社会の仕組みや問題点、出来事ではなく、自分の内側にあるコンプレックスを伝えること。
ウ 社会の仕組みや問題点、出来事ではなく、この世界がどれほど矛盾に満ちた世界かを伝えること。
エ 社会の仕組みや問題点、出来事ではなく、人間の力を超えた自然のすばらしさを伝えること。

問六 — 部⑥を言い換えた部分を〈文章Ⅰ〉から十三字で抜き出しなさい。

問七 — 部⑧と意味の上で対比されている語句を文中から五字で抜き出しなさい。

問八 — 部⑨「自分だけの湖」と感じた筆者でしたが、翌日には自らこの思いを否定します。その理由にあたる

る次の答えの空らん部分を〈文章Ⅱ〉から五字で抜き出しなさい。

筆者が動物たちの自然の中にある姿に触れたとき、自分だけの湖という思いが自分の（ ）だと
いうことに気づいたから。

問九 — 部⑩で筆者はどんな「期待」を持ったのか、もつともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 泊まることが久しぶりだったのできつと楽しいだろうと考えたこと。

イ 誰もいないだろうから湖を独り占めできるに違いないと考えたこと。

ウ 現代社会がすぐそばにあるので寂しくないだろうと考えたこと。

エ キャンプ地が近いので装備が整っているだろうと考えたこと。

問十 — 部⑪の行動はルーンのどんな思いが表れているか、その理由にあたる次の答えの空らん部分に〈文章

Ⅱ〉からそれぞれ字数に合わせて抜き出しなさい。

この行動は、ルーンの親鳥が巣の中にある（ア 一字 ）を（イ 三字 ）として行っている

（ウ 二字 ）の意味を持っている。

問十一 — 部⑬とはどういう「季節」か、具体的に表現されている部分を〈文章Ⅱ〉から解答らんに合うように七字で抜き出しなさい。

問十二 ———部⑩と同じことを言っている語句を文中から二字で抜き出しなさい。

問十三 ———部A、Bの「違和感」について五人の生徒が意見を言いました。本文の趣旨に沿っている人は誰と誰か、二人の記号を答えなさい。

生徒A 筆者がジャーナリストとして伝えたかったのは、自然の一部としてのバランス感覚を大事にできるような世界です。日々新しく起こっているニュースを伝えることには少し違和感がありそうですね。

生徒B そうですね。だから毎日同じことを伝えるだけということに違和感を感じるのかもしれませんが、もっと日々新しく起きるニュースに注目した方がよいのかもしれませんが。

生徒C そうかなあ、筆者が望んでいるのはそのままの自然を伝えることだと思いますよ。その自然を見つげるために自然の中で違和感の少ない車やモーターボートを使うのは仕方がないということでしょう。

生徒D ありのままの自然を伝えるのは逆に難しいのかもしれませんが、だからこそ、自然の中で感じられる違和感に気づける感覚が大事なのだと思います。

生徒E やはり自然は人間の思うようにはならないものですから、目の前にある自然に違和感を感じた時こそ、声を大にして多くの人にニュースを届けていかなければなりませんね。

二

次の中国の詩「春曉」を日本語の語順に従ってかなを交えて書き直したものと、それを日本人が訳した訳詩を読んで、後の問いに答えなさい。

しゅんぎやう 春曉
もうこうねん 孟浩然

しゅんみんあつめ 春眠暁を覚えず

しよしよていちよう 処処啼鳥を聞く

やらいふうう 夜来風雨の声

花落つること知る多少

〔訳詩〕

ハルノネザメノウツツデ聞ケバ

*ウツツ……夢か現実かはつきりしないような状態。

トリノナクネデ目ガサメマシタ

ヨルノアラシニ雨マジリ

散ツタ木ノ花イカホドバカリ

(井伏鱒二)

春あけぼののうす眠り

*あけぼの……夜がほのぼのと明け始めるころ。

枕にかよう鳥のこえ

風まじりなる夜べの雨

*夜べ……昨夜

花散りけんか庭もせに

(土岐善麿とぎぜんまろ)

*けんか……ただらうか

*庭もせに……庭も狭いほどに

さめやらぬところに遠く

*さめやらぬ……じゅうぶん目が覚めきらない

またちかく とりなきかはす

*とりなきかはす……鳥鳴き交わす

あめ風は止みやしぬらむ

*止みやしぬらむ……止んでしまったのだろうか

花や落ちし 落ちずやいかに

*いかに……どんな様子だ。

(佐藤一英さとういちえい)

問一 この「春暁」のような中国の詩を何詩と言いますか。次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 国詩

イ 華詩

ウ 中詩

エ 漢詩

問二 この詩は四行からなる詩ですが、このような中国の詩の「起承□結」という構成は、後に文章を書く際の手本とされるようになりました。□の空らんには当てはまる漢字一字を次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 帰

イ 完

ウ 転

エ 終

問三 一行目「春眠^{しゆんみん}暁^{あかつき}を覚えず」とありますが、これは作者のどのような気持ちを表しているでしょうか。次の中からもっともふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

ア 春の眠りはまだ外は寒いので、起きていても布団からは出たくない。

イ 春の眠りは困ったもので、日が昇って昼間になっても起きる気になれない。

ウ 春の眠りは浅く、夜中に何度も目が覚めて寝不足だ。

エ 春の眠りは心地よく、夜が明けたのもわからないほどだ。

問四 二行目「处处^{しよしよ}啼^{てい}鳥^{ちやう}を聞く」の「处处」の意味としてもっともふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア あちこちで

イ チュンチュン（という鳴き声で）

ウ 鳥かごの中で

エ ゆめで

問五

三行目「夜来風雨やらいふううの声」の「声」はこの詩ではどのような意味で用いられているでしょうか。次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 歌

イ 音

ウ 涙

エ 喉のど

問六

四行目「花落つること知る多少」の意味としてもっともふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 花がどれだけ散ったか確かめてみよう。

イ 花はたくさん散ってしまったのだろう。

ウ 花が散ったことはある程度はわかるよ。

エ 花はどれほど散ってしまっただろうか。

問七 この詩の中で、作者は今どこにいますと考えられますか。次の中からもっともふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

ア 寢床

イ 庭

ウ 部屋の窓辺

エ 玄関

問八 この詩について先生と生徒が話し合っている。次の生徒A～Dの四人の発言の中で適当でないものを一つ選び、記号で答えなさい。

先生 この詩は非常に有名な詩で、多くの日本人に愛されてきました。有名な詩人や歌人だけでなく、小説家まで訳詩をしているよ。

生徒A 小説家の井伏鱒二が訳詩しているのには驚いたなあ。それにしても、井伏鱒二はすべて七音の繰り返して訳しているね。

生徒B 土岐善麿の訳詩も、すべての行が七五調（七音・五音の順番でくり返す形式）で、さすが歌人といった感じだね。

生徒C 佐藤一英の訳詩は斬新ざんしんな感じがするよ。第一句目に「春眠暁を覚えず」とあって、井伏鱒二も

土岐善麿も訳詩の中に「春」という言葉を入れているのに、佐藤一英の訳詩には入っていないもの。

生徒D いろいろな人の訳詩を比べることで、同じ詩を読んでも、人によって想像している様子が異なっていることがわかって、非常に興味深かったよ。

三 次の電話の際のやりとりを読んで、後の問いに答えなさい。

〔小川が同級生の村山花子の家にかける〕

- ① 村山 はい、もしもし。
- ② 小川 どなたですか？
- ③ 村山 村山ですけれども、どなたですか？
- ④ 小川 明治学院小学校六年の小川次郎です。
- ⑤ 村山 用件は何ですか？
- ⑥ 小川 花子はいる？
- ⑦ 村山 今、塾に出かけているのでいません。
- ⑧ 小川 わかりました。それでは失礼します。(電話を切る)

問一 この電話のやりとりの問題点を次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

- ア ②で、電話をかけた小川が自分から名乗っていない。
- イ ③で、電話を受けた村山が小川の「どなたですか？」という言葉を繰り返している。
- ウ ④で、電話をかけた小川は名乗るだけで、自分から用件を述べていない。
- エ ⑤で、電話を受けた村山が小川に用件を聞いている。
- オ ⑦で、電話を受けた村山が花子の所在を教えている。
- カ ⑧で、電話をかけた小川が花子がいないとわかると電話を切っている。

問二 ⑥小川「花子はある？」は、本来どのように話すべきですか。正しい言い方に直しなさい。

四

次の①～④のことわざについて、①と②は似た意味のことわざを、③・④は反対の意味のことわざを後から選び、記号で答えなさい。

①石の上にも三年

②絵に描いたもち

③果報は寝て待て

④転ばぬ先の杖

ア 恩をあだで返す イ 坊主憎けりや袈裟けさまで憎い ウ 待てば海路かいろの日和ひよりあり

エ まかぬ種は生えぬ オ あばたもえくぼ カ 渡る世間に鬼はなし

キ 泥棒を見て縄を縛なう ク 急がば回れ ケ 雨だれ石をうがつ

コ 石橋をたたいて渡る サ 捕らぬたぬきの皮算用

五

—部の漢字の読みを答えなさい。

- ①友人の頼みを快く引き受けた。
- ②富士山の頂に雪が積もる。
- ③優勝をして感極まって泣いた。
- ④カギをかけないなんて無用心だ。
- ⑤十年の歳月を経て完成した。

六

—部のカタカナを漢字で答えなさい。

- ①胃は消化キカンだ。
- ②卒業式をキョコウする。
- ③団長が団員をトウソツする。
- ④劇で主役をツトめた。
- ⑤風邪をひいて鼻水がタれた。